

児童書業界はきびしい時代だが……



書店がどんどん潰れていく時代、とくに児童書の世界は、きびしいものがある。ただ「今始まったことではない」と個人的には思っているので、あまり焦っていない。「こういう本を売ろう」とすれば、いつの時代でも利用してくれるお客様はいるわけで、本が読める子がいるかぎり児童書は残る。すぐれた本も残る。

もともと地域を対象に商売をしてこなかったので(ご存じの通り、今でも県外のお客様が大半で、以前は70%もいた) 全国という分母があれば分子もそれなりにあるのだから、本を読ませたいという親がいれば、政府がデジタル化を進めても「華氏451度」まで温度は上がらないだろう。デジタル化で影響されるのは、もともと本を読まない層で、これはもう最初からお客にはならない人たちだからいろいろアプローチしてもムダなのだ。

「以前は県外客が70%」と言ったが、たしかに県内のお客様は多くなかった。ところが、左のような記事を児童書作家の杉山亮さんが山梨日日新聞上に書いてくれたと

たんに、県内が増え始めた。

まったく高名な作家さんの言葉の影響はおどろくほど大きい。ブッククラブの性質上、宣伝ができない(低い年齢制限があるため)ので、こういう記事がでると心ある人がすぐに目を向けてくれるというわけだ。紹介制なので、会員が薦めてくれれば狭い県内ですぐに、一定数を満たすことができた。まったく人のつながりとはありがたいものなんです。

まさか、こんな小規模のブッククラブを評価していただいていたとはびっくりです。(以下記事の拡大)

杉山亮の遊んだり、学んだり **ブッククラブで良書と出会う** 杉山亮



子どもたちが本を読まなくなったといわれて久しい。理由はいろいろ考えられるが、最大の理由は決まっている。親が子どもに本を買ってやる習慣を忘れたからだ。

ぼくの家は狭い借家で、質素な暮らしだったが、それでも父は毎月一度、ぼくを書店につれて行って、本を買ってくれた。自分のものとなれば、それはもう、せつせと読むものだ。

さて、絵本や児童書の専門店では、ブッククラブというのをやっていることが多い。入会してお金を払うと、毎月一、二冊絵本か児童書が送られてくるシステムのことで、子どもの年齢によって何コースかあるのがふつうだ。書店の側にすると毎月一冊、確実に本が売れ、利用者の側からすると毎月一冊、確実に本が手に入る。この方法は悪くない。

もちろん、子どもの本は自分で選ぶか、もしくは親子でいっしょに選びたいという人、自分も本好きでセレクトに自信があるという人はそれでいい。

だが、現実はどうもそううまくはいかない。

だいいち、近所に書店などないというところに住んでいる人だって多い。そんなとき、もちはもちやで児童書に詳しい人に子どもの本を見たててもらおうというのは、ひとつの見識かもしれない。

さて、実はぼくが知る限り日本で一番しっかりしたブッククラブはなんと甲府にある。「ゆめや」という小さな絵本専門店だ。

「こどもが2歳未満で、会員の紹介がなければ入れない」というむずかしい基準があるにもかかわらず、すでにクチコミで全国に千人の会員がいる。店には子どもの性別だの家族構成だの興味だのさまざまな要素を記したカルテのようなカードがあり、それにそって少しずつ配本が変わる。

で、どの道を通ろうと、2歳から始めた子の半分くらいが、小学6年生まで続けていて、そうなる「黄金の羅針盤」だの「はてしない物語」だの、重厚なファンタジーが配本され、それをみんな楽しめるようになるという。

すばらしい。そこまでいけば、トルストイだってドストエフスキーだって手に届くところにある。

ちなみに、ぼくの本も配本されることがある。そんなときは、あまっちゃよろい本を許さない店主のきびしい選考をクリアしたんだと、少しほっとする。(児童書作家)


